

『典雅詞』及び『燕喜詞』諸本

斬 春 雨

はじめに

『燕喜詞』は宋人曹冠の詞集であり、『典雅詞』に収録されて傳わった。『典雅詞』の編者は明確ではないが、趙萬里、祝尙書、吳熊和の研究に據つて、陳起と考えてよいであろう。最初に『典雅詞』の著者について言及したのは趙萬里である。趙氏は『校輯宋金元人詞』の序文に次のように述べている。

更以江陰繆氏藏本行款推之、半葉十行、行十八字、與汲古閣影宋陳氏書棚本趙以夫虛齋樂府、許棐梅屋詩餘、戴復古石屏長短句均合。平闕之式亦有同者、與毛氏影宋本知稼翁詞、和石湖詞、辛稼軒詞亦無不合、殆均爲陳氏書棚所刻。

更に江陰の繆氏藏本の行款を以て之を推せば、半葉十行、行十八字、汲古閣の影宋陳氏書棚本趙以夫の虚齋樂府、許棐の梅屋詩餘、戴復古の石屏長短句と均しく合す。平闕の式も亦た同じくする者有り、毛氏影宋本の知稼翁詞、和石湖詞、辛稼軒詞と亦た合せざる無し、殆んど均しく陳氏書棚の刻する所と爲す。

趙萬里は『典雅詞』は南宋臨安の陳氏書棚によつて刻されたものであると判断した。それに對して、祝尙書は『宋人總集叙錄』で「雖直接的

文獻依據尙嫌不足、但有一定說服力、故當代詞學研究者多從其說（如吳熊和『唐宋詞通論』）。本書姑從之。」と述べ、『典雅詞』の著者の箇所に「陳起 編」（『宋人總集叙錄』、三三九頁）と記している。また吳熊和の『唐宋詞通論』を検すると、第六章「詞籍」「典雅詞」に「錢塘陳氏書棚刊行」と記している。

時代を久しく經て、散逸も多いので、『典雅詞』にもともと収録されていた具體的な詞集の数は既に知るよしがなく、現存する限られた資料からその一端を窺うしか方法がない。考證できる範囲で『典雅詞』を最も早く論じた人物は朱彝尊である。朱氏はかつて『典雅詞』を六冊（或は三冊、詳しくは後述する）を入手したが、その跋文「跋典雅詞」に「『典雅詞』、不知凡幾十冊。（中略）考正統文淵閣書目止著諸家詞三十九冊、而無典雅之名、疑卽是書（『典雅詞』は凡て幾十冊なるかを知らず。（中略）考うるに正統文淵閣書目に止だ諸家詞三十九冊を著すのみにして、典雅の名無し、疑うらくは卽ち是の書ならん）」と述べている。朱氏の跋に據れば、『典雅詞』は少なくとも數十冊あり、所收の詞集はおそらく百種に及ぶであろう。しかし、現存する『典雅詞』は極少數である。趙萬里は『校輯宋金元人詞』の序文に「傳世典雅詞、至少有十九種矣」と主張している。この十九種の詞集を挙げると、姚述堯『簫臺公餘詞』、倪偁『綺川詞』、邱壑『文定公詞』（この三種『千頃堂書目』、『宋史藝文志補』並著、卽ち三種本）、陳允平『西麓繼周集』、曹冠『燕喜詞』、趙磻老『拙菴詞』、李好古『碎錦詞』、

馮取洽『雙溪詞』、袁去華『袁宣卿詞』、程大昌『文簡公詞』、胡銓『澹菴長短句』、失名『章華詞』、劉子寰『篁嶠詞』、阮閱巢令君『阮戶部詞』、黃公度『知稼翁詞』、陳亮『龍川詞』、侯寘『爛窟詞』（江陰繆氏傳鈔汲古閣本、即ち十四種本）及び歐良『撫掌詞』、張輯『東澤綺語債』（歐張二本は勞權所見朱彝尊藏本、即ち十種本）、計十九種である。實は勞權が寫した朱彝尊藏本は歐張二本があるだけでなく、李綱の『丞相李忠定公長短句』及び勞權が増入した張輯『清江漁譜』という二本を加えると、二十一種となる。また鄧子勉は上海圖書館所藏吳湖帆舊藏本『典雅詞』六種本を發見し、張掄『蓮社詞』、京鐘『松坡居士詞』二種を補うことを得た。鄧氏はまた繆荃孫の『目錄詞小說譜錄目』卷二の記載により、陳允平の『日湖漁唱』一卷『補遺』一卷『續補遺』一卷は『典雅詞』より出たものであると述べた。そうすると、現存する『典雅詞』に所收の詞集は二十四種であることが明らかである。

『典雅』という名前が附けられた時代について、趙萬里は先述の序文で「宋世舊題」と述べている。按ずるに、現存資料では、『永樂大典』に『典雅詞』の名前が既に現れている。『永樂大典』卷一〇九九九に「丘宗卿典雅詞」「浪淘沙・朱都大知荊州作次韻謝之」^⑥という記載があるため、『典雅』を「宋世舊題」とするのは間違いまいであろう。

小稿は『典雅詞』の収録状況及び管見の及ぶ範囲での『燕喜詞』諸本とその流傳状況について考察する。まずは詞集『典雅詞』から見ていきたい。

一 『典雅詞』の諸本

1 十四種本

(1) 靜嘉堂文庫藏毛氏汲古閣影宋鈔本

この本はかつて村上哲見先生によって紹介されており、内容は以下の通りである。

仿宋大字精鈔、每冊有書箋、上邊題書名及撰者名、下邊題「典雅詞幾（壹至伍）」四字、半葉十行、行十八字、白口左右雙邊、鈐「汲古閣」、「子晉」、「毛辰之印」、「斧季」諸印、其爲汲古原鈔、不容懷疑、又有黃丕烈、蔡廷相、陸樹聲等諸家印記。

影宋鈔本は五冊。各冊の収録内容は次のようである。

- 第一冊典雅詞壹 『西麓繼周集』陳允平衡仲
- 第二冊典雅詞貳 『燕喜詞』曹冠宗臣 『拙菴詞』趙礪老涓師 『碎錦詞』李好古
- 第三冊典雅詞叁 『雙溪詞』馮取洽熙之 『袁宣卿詞』袁去華宣卿 『文簡公詞』程大昌泰之
- 第四冊典雅詞肆 『澹菴長短句』胡銓邦衡 『章華詞』『篁嶠詞』劉子寰圻父 『阮戶部詞』阮閱
- 第五冊典雅詞伍 『知稼翁詞』黃公度師憲 『龍川詞』陳亮同甫 『爛窟詞』侯寘彥周

(2) 日本國會圖書館・京大人文学研究所藏本（マイクロフィルム覆寫による）

この本は繆荃孫藏鈔本であり、美國國會圖書館攝國立北平圖書館藏鈔本膠片景照である。五冊、烏絲欄、左右雙邊、單魚尾。白口。半葉十行、

行十八字。卷首鈐「藝風堂／藏書」、「荃孫」、「國立北／平圖書／館所藏」、「友季所見」印。第一冊末「古書流通處」印。每冊の卷末に批注「尊嶽校讀」、鈐「近知／詞人」印。しかし、五冊を通して校讎を加えた痕跡が見られない。

繆荃孫藏抄本の據所について王重民は『中國善本書提要』六八三頁に「卷内有荃孫、藝風堂藏書等印記、考藝風藏書續記載是書、不言所自。(中略)然謂爲出於彝尊藏本、當無可疑」と述べたが、これは誤りである。朱彝尊藏本に収録される詞集は繆本と異なるため、別系統の鈔本である(詳しくは後述する)。また台湾國家圖書館藏鈔本(五冊、清烏絲欄鈔本。現藏國立故宮博物院圖書館)は同じく原國立北平圖書館藏鈔本膠片である。

(3) 南京圖書館藏丁丙鈔本

五冊、烏絲欄、左右雙邊、單魚尾、白口。半葉十行、行十八字。鈐「八千卷樓珍藏善本」、「錢塘丁氏正修堂藏書」、「嘉惠堂丁氏藏書之印」。この丁丙鈔本の所収は上記の汲古閣本と同じである。

鄧氏は「繆氏藏本與丁氏藏本比對、除『西麓繼周集』排列的次第等略有出入外、其餘種類、行款及存佚狀況悉合。」と述べている。

2 十種本(中國國家圖書館藏勞權鈔校本)

上記の十四種鈔本は毛晉汲古閣影宋鈔本を源としているが、これと異なる系統の鈔校本が存在する。即ち中國國家圖書館所藏の勞權鈔校本である。十種本の詳細は以下のとおりである。

『典雅詞』十種 勞權鈔校本 三冊

正文及び目錄、無界十行、行十八字。版心白口、無魚尾。「詞集名

(丁附)」。本文には朱筆を用いて評點・訂正を加える。墨筆や朱點、朱圈

が往々に見られる。總目がなく、毎卷首に目錄を置く。毎冊の表紙左邊に「典雅詞 竹垞先生藏本」と題す。

第一冊表紙に「梁溪詞 補遺 丹鉛精舍輯／撫掌詞／東澤綺語 補遺 丹鉛精舍輯／清江漁譜 丹鉛精舍」と題す。

首は「丞相李忠定公長短句目錄」、次行低四格詞調。目錄の末に接して「笑不知天命明珠玉斗漫今撞碎」とあり、本文は目錄の四首目の「水龍吟・光武戰昆陽」から始まる。目錄に記載されている第一首「望江南」、第二首「傳調虞美人」、第三首「水龍吟」は本文に鈔されていない。本文十四葉。「一剪梅」(數點梅花玉〔雪〕嬌)と次首「萬古秣陵」の間に詞調「玉蝴蝶」三文字が補入されている。次いで『丞相李忠定公長短句補遺』「西江月・贈友人家侍兒名鶯鶯者(小字雙行)」「樂府雅詞拾遺上」一葉。末に「嘉熙元年九月中澣莆田劉克遜」の序文一葉。「撫掌詞目錄」、次行低二格詞調。本文は八葉。

次空一葉、「東澤綺語目錄」一葉。本文は十九葉から廿五葉までである。廿六葉目は「東澤綺語補遺」、「豆葉黃」(清明小院)、「謁金門・春恨」(花事淺方)、「徵招」(飛鴻又作)「陽春白雪」三首を補入している。次空一葉、「清江漁譜目錄」、本文五葉。

第二冊、表紙に「雙溪詞／袁宣卿詞／程文簡公詞」と題す。

首は「雙溪詞目錄」一葉。本文は第一葉から第九葉までであり、第十葉から十四葉までは詞調のみ鈔しており、本文は空白である。ままた本より補入する部分があり、詳細は後に録す。次空一葉、「袁宣卿詞」(目錄)二葉、本文廿七葉。廿五、廿六葉の本文に朱圈を施している。次空一葉、「文簡公詞目錄」一葉、本文十三葉、最後の「水調歌頭」は「紅樹迎風舞髻髻采衣雲容應應爲處侍分附」の一句のみである。第三葉、七葉本文に朱點や朱圈を加える部分がある。

第三冊、表紙に「燕喜詞／拙菴詞／碎錦詞 補遺 丹鉛精舍輯／咸豐

壬子夏借知不足齋所藏／曝書亭傳錄宋鈔本影寫／丹鉛生題」と題す。首は「燕喜詞敘」三葉。次に「燕喜詞目錄」一葉。本文十九葉。第二十葉は白紙であり、ただし中縫に「原鈔缺末葉」とある。一葉空白して「拙菴詞目錄」半葉。本文五葉。次は一葉空白して「碎錦詞目錄」半葉、ただし中縫に「原鈔缺今補」とある。本文四葉。第五葉は「碎錦詞補遺」、「謁金門」(花過雨)「陽春白雪」一首ある。最後朱彝尊の「跋典雅詞」があつて、下記のごとくいう。

典雅詞不知凡幾十冊予未通藉時得一冊於慈仁寺集牋皆羅紋惟書法潦草蓋宋日胥史所鈔南渡以後諸公詞也後予分纂一統志昆山徐尚書請于朝權發明文淵閣書用資考

證大學士令中書舍人六員編所存書目中亦有典雅詞一冊

予亟借鈔其副以原書還庫始知(是)編爲中秘所儲典雅詞也既而工部

郎靈壽傳君以家藏鈔本(詞)一冊貽予則尺度題牋與予曩所購

無異考正統中文淵閣書目止著諸家詞三十九冊而無典雅

之名疑卽是書著錄者未之詳爾予所得不及十之二然合離聚散之故

可以感也^⑩

括弧にある「是」「詞」は勞權が朱筆で添えた文字である。

印記・首冊首葉「曾在趙元方家」朱文長方印、「勞權／之印」白文方印、「北京／圖書／館藏」朱文方印。卷尾「趙氏／元方」朱文方印。第二冊護葉「蕭山朱氏／所藏舊本」白文長方印、「雙溪詞目錄」首「翼奩／鑑賞」朱文方印、「勞權／之印」白文方印。「雙溪詞」本文首「無悔齋藏」朱文長方印、「一塵／十駕」朱文小印。「袁宣卿詞」目錄首「勞權／之印」白文方印。第三冊首葉「曾在趙元方家」朱文長方印、「趙鈔／珍藏」白文方印。「燕喜詞目錄」首「勞權／之印」白文方印。卷末「北京／圖書／館藏」朱文方印。

『典雅詞』十種本眉批逐錄

上段は詞調名、中段は批注の該當部分、下段は批注の録文である。

第一冊

『撫掌詞』

不得編入詞

『東澤綺語』

疎簾淡月・寓桂枝香秋思

春白雪同絕妙好詞吹

貂裘換酒

作乙

淮甸春・寓念奴嬌

作泗

如此江山・寓齊天樂

廣寒秋

校正

東仙・寓沁園春

／漁譜作波

沙頭雨・寓點絳脣

作曉

垂楊碧・寓謁金門

作簾

闌干萬里心・寓憶王孫

杏梁燕・寓解連環

作粘

月底脩簫譜・寓祝英臺近乙未之秋高郵／朱使君錢塘舟中 花菴詞選

脩作修使作史／有北關自二字

〔丹砂有奇趣〕

別本趣作處

憶蘿月・寓清平樂

〔兩袖五湖烟雨〕

陽春白雪煙

作風

賀新涼・壽朱湛盧先生

〔任將簾捲海棠紅〕

任清江漁譜

作但紅作開

〔吹入東風不老〕

東作春

〔秦郵小 爐峰香〕

秦作春爐作

廬

〔清江漁譜〕

前調（賀新郎）

〔壽湛盧先生〕

綺語債有朱

字

第二册

〔双溪詞〕

金縷〔曲〕

〔送別定軒／即賀新郎也〕

花菴詞選無調作賀

新郎別下有江字

沁園春

〔二月二日／壽玉林〕

花菴詞選作中和節

日爲黃／玉林壽

〔筭三春仲月〕

仲作中

〔百年大齊〕〔去聲〕

有音注二字

摸魚兒

〔玉林〔君〕爲遺蛻亭山中桃花／賦也〕花菴詞

選作和玉林韻蓋／爲遺蛻山中桃花作

〔却來時路〕〔以後〕

据花菴中興絶／妙

詞選補〔墨筆〕

蝶戀花・和玉林韻

全一首

据花菴中興絶／妙

詞選補〔墨筆〕

〔袁宣卿詞〕

水龍吟・雪

〔晚來側側清寒〕

環卿云側側非誤

校改作／側側非

賀新郎

全一首

据陽春白雪七校

雨中花

〔野水簾天遠〕〔兼〕

環卿云當作連

玉樓春

〔引成密約笑言聞認得真情離別處〕二句

乃改用張文潛詩

※印の〔寓鵲橋仙〕〔曲〕〔去聲〕〔兼〕は本文に赤字で添えた文字であり、〔却來時路〕〔以後〕は即ち後闕の内容は全部補入したものである。全體的に眉批はほぼ朱筆で記入されているが、上に示したように墨筆が用いられる場合もあり、本文では、朱筆（まゝ墨筆もあり）で誤字を描改訂正し、また批點を加えるところもある。上記から分かるように、勞權は主に『花菴詞選』及び『陽春白雪』をもって鈔本『典雅詞』を校注したのであり、校注が多く施されたのは第一册『東澤綺語』、第二册『雙溪詞』及び『袁宣卿詞』である。

また十種本所收の『清江漁譜』は勞權が鈔する時に増入したものであり、もとの「知不足齋所藏曝書亭傳錄宋鈔本」にある詞集ではない。傳增湘『藏園羣書經眼錄』卷十五に著録があり、以下のように記している。

清勞翼卿權手鈔本。目列後、梁溪詞補遺附 題李忠定公長短句 撫掌詞後

學南城歐良 東澤綺語補遺附 鄱陽張輯宗瑞 清江漁譜丹鉛增 鄱陽張輯宗瑞

雙溪詞雙溪擬巢翁延平馮取治熙之 袁宣卿詞豫章袁去華宣卿 文簡公詞新安

程大昌泰之 燕喜詞雙溪居士曹冠字宗臣 拙庵詞東平趙礪老涓師 碎錦詞補遺 附 鄉貢免解進士李好古 後錄朱竹垞彝尊跋。後題

「咸豐壬子夏借知不足齋所藏曝書亭傳錄宋鈔本影寫。丹鉛生題」(己未)^①
 また傳增湘の『增園訂補邵亭知見傳本書目』卷十六下にも次のようにある。

典雅詞十種十卷

清勞權摘鈔。清勞權手鈔本、十行十八字、無格、勞氏自校竝跋。所收爲李綱、歐良、張輯、馮取洽、袁去華、程大昌、曹冠、趙蟠老、李好古九字、内張輯除東澤綺語外又有清江漁譜、爲勞權增入。余藏。^②

『藏園羣書經眼錄』の記述の末尾にある「己未」は「該書編纂者の傳熹年氏が傳增湘の觀書の時期を推測して加えたものである」。^③「己未」は民國八年(一九一九年)であり、末尾に「余藏」とあるので、おそらく同じ年に傳增湘は十卷本を閲覽し收藏したのであろう。また翌年に傳增湘はこの十種本を用いて『宋元三十一家詞』に校勘を加えたのである。『藏園羣書校勘跋識錄』集部「宋元三十一家詞三十一卷」條に次のようにある。

清王鵬運輯。光緒十四年臨桂王氏家塾四印齋刊本。庚申年(一九二〇)據勞權手鈔本『典雅詞』十種校勘。(後略)

各集藏園先生跋識語錄如下。

『燕喜詞』卷末葉識曰、庚申四月初七日、據丹鉛精舍鈔本校。沅叔。

『拙庵詞』卷末葉識曰、據丹鉛精舍寫本勘讀、庚申四月初七日、沅叔。

『宣卿詞』卷末葉識曰、庚申三月十七日、據勞巽卿手寫本校正。沅叔。

『碎錦詞』卷末葉識曰、庚申四月、沅叔從勞巽卿寫本校讀一過。

『撫掌詞』卷末葉識曰、庚申三月十七日、據勞巽卿手寫『典雅詞』勘讀。沅叔。^④

傳增湘が勞鈔本を用いて四印齋刊本に校勘を行ったのは、上記の五種

であり、校勘時間は主に一九二〇年の三月と四月に集中している。
 王文進『文祿堂訪書記』下卷五にも十種本が記載されており、内容は次のようである。

典雅詞十種

雙溪詞馮取洽 袁宣卿詞袁去華 程文簡公詞程大昌 撫掌詞歐良

燕喜詞曹冠淳熙丁未陳詹二序 拙庵詞趙蟠志 碎錦詞李好古附補遺 東澤

綺語張輯附補遺

清江漁譜張輯 梁溪詞李綱嘉熙元年劉克遜序附補遺

清勞季言手鈔本書衣題曰咸豐壬子夏知不足齋藏曝書亭傳錄宋鈔本影寫丹鉛生題有勞權丹鉛精舍印

朱竹垞跋曰典雅詞不知凡幾十冊予未通籍時得一冊于慈仁寺(後略)。^⑤

この「典雅詞十種」は言うまでもなく勞權の鈔本であるが、『文祿堂訪書記』に「清勞季言手鈔本」というのは明らかに誤っている。勞季言とは、勞格のことであり、字は季言、一字は保艾、勞權字は巽卿の弟である。同じ十種本とはいえ、傳增湘と王文進が記した内容とは若干の相違が見られる。まず、詞集の収録順が異なる。『藏園羣書經眼錄』は『丞相李忠定公長短句』から始まるが、『文祿堂訪書記』は『雙溪詞』から録している。つぎに『拙庵詞』の著者である趙蟠老は趙蟠志になっており、これも明らかに王文進本の抄録の誤りである。さらに傳增湘は張輯の『清江漁譜』は勞權によって増入されたものであると明確に述べているが、『文祿堂訪書記』にはこの点について示されていない。『文祿堂訪書記』には『燕喜詞』に「淳熙丁未陳詹二序」、『梁溪詞』に「嘉熙元年劉克遜序附補遺」という説明的な文字が附け加えられているので、王文進がこの十種本を實際に閲覽したことが想像できるが、中國國家圖書館所藏の勞權鈔本を確認して比較すると、やはり傳增湘『藏園羣書經眼錄』の記

述がさらに厳密で精確であると思われる。

3 竹垞先生藏本（『宋八家詞八卷』 中國國家圖書館所藏マイクロフィルム）

清初鈔本。一冊。半葉十行、行十八字。無界。欠損がある。副葉の一枚目の左邊に「□本 竹垞先生藏本 三終」とあり、下に「遼圃收藏」の印を鈐す。右邊に目録があり、「□詞 李綱／□掌詞 歐良／□澤綺語 張輯 以上俱未刻 詞綜選十一首」とある。副葉の裏に目録があり、「燕喜詞／拙庵詞／碎錦詞／李忠定長短句／撫掌集／東澤綺語／雙溪詞／袁宣卿詞／文簡公詞」と題す。「李忠定公長短句」の下に墨丁があり、次行の「撫掌集」の下に異なる筆迹で「東澤綺語」と書かれており、これは明らかに勞權の筆迹である。二枚目の副葉、左邊に「宋詞鈔本 四終／竹垞先生藏本」と題し、右邊に目録があり、「□喜詞 曹冠／缺半首（小字双行）入全／□庵詞 趙礪老／全（小字雙行）／□錦詞 李好古／全（小字双行）」とある。

『燕喜詞』、首に陳鬚の「燕喜詞敘」（欠損あり）二葉半を録し、「北京／圖書／館藏」、「遼圃收藏」の印がある。次に一葉欠落する。その後、詹倣之の序（上部欠損あり）二葉。「燕喜詞目録」二葉（欠損あり）、欠損した詞調の文字は全部墨筆で補われている。目録の下に間々記號があり、葉數であると考えられる。

正文「滿江紅」（淳熙丁酉・日暖煙輕）二首に評點及び「去」「上」「平」の平仄の文字が施されている。次首の「桂飄香・原名花心動」に評點があり、「魯」「鬱」二字に塗改があり、改訂後の文字は上方に書かれている。

『拙庵詞』、首は目録一葉、「燕喜詞目録」と少し異なっており、毎詞調の下に數字がある。辨識するのが困難でありながら、『燕喜詞』の正文の上欄

左上角に書かれた大きな數字から推測し累算すると、詳しくは次のようである。

滿江紅	二二	江城子	二八
念奴嬌	二三	水調歌頭	二八
水調歌頭	二四	醉江月	二九
永遇樂	二四	賀新郎	二九
醉蓬萊	二四	清平樂	卅
鷓鴣天	二五	浣溪沙	卅
生查子	二五	菩薩蠻	卅
南柯子	二六		
浣溪沙	二七		
八聲甘州	二七		

正文を検すると、これは『拙庵詞』と次に鈔されている『碎錦詞』の兩詞集の目録である。しかし普通の上下の書寫順と異なっており、上記の數字の通り目録は先に上段を全部書写してから、下段は次に書かれたものである。「滿江紅」から「浣溪沙」までは「拙庵詞目録」であり、「八聲甘州」から「菩薩蠻」までは「碎錦詞目録」である。また目録だけ筆跡が異なるので、ほかの人よって補われたのである。

『拙庵詞』正文首に「遼圃收藏」の印があり、正文首の「滿江紅」「見說春時」から「便向杯中覓」の始め二行に「去」「入」「平」の文字が記されている。

『丞相李忠定公長短句』、「丞相李忠定公長短句目録」二葉、題目の下に「遼圃收藏」の印記がある。詞調の下に間々淡墨で葉數が書かれている。目録の末尾と正文「水龍吟・光武戰昆陽」の間に墨線が引かれ、眉批に

「原本目録後（玉胡蝶水龍吟後）有十三字另可附後／笑不知天命明珠玉斗漫／今撞碎」とある。正文「望江南・過分水嶺」「極目暮雲長。行嶺水自分流」句の後に墨筆の分段の記號が施されており、眉批に「雪嶺水下／另一首」とある。正文より低一格の「豫在沙場嘗作滿庭芳一闋」云々三行の上欄に「豫在沙場本／題目該伍四／字」と書かれている。また正文「一剪梅」（數點梅花玉〔雪〕嬌）と次首「萬古秣陵」の間に詞調「玉蝴蝶」三文字が補入されている。末に劉克遜の序文がある。

次に『撫掌詞』及び『東澤綺語』の目録二葉、題目の下に「荳圃收藏」の印記がある。先述の『拙庵詞』と同じく、上下の順序ではなく、上段と下段の形で書かれている。「多麗」から「閏年」までは『撫掌詞』の目録であり、次の「疎簾淡月」からは『東澤綺語』の目録である。但し、目録二葉目の詞調「山漸青」と「碧雲深」の行間に淡墨の「本格」という二字があり、二詞調がその上に重ねて書かれたのは、『撫掌詞』及び『東澤綺語』の目録が後に補ったものであることを示している。

『撫掌詞』「正月」の上方に眉批「雖名曰詞／實詩也不／用查調」がある。

『東澤綺語』詞題の上方に眉批「詞綜云張輯／字宗瑞鄱陽／人有東澤綺語／二卷」、「詞綜選十一首／詞上加、記之。」即ち正文の眉批に『詞綜』卷十五にも採取された十一首の詞作に「」を加えて示したのである。正文「如此江山・寓齊天樂」「詩仙一去」句に眉批「仙詞綜作人」。「山漸青・寓長相思」「吟到江南第幾程」句に眉批「吟詞綜作行／注一作吟」。「沙頭雨・寓點絳脣」「晚愁情緒」句に眉批「晚詞綜作曉」。「花自落・寓謁金門」「聞知秀句」句に眉批「聞知詞綜作／閑却」。「摸魚兒・和玉林韻」の正文は三行目から缺けており、眉批「忘字下遼詞綜／補入詞綜摸魚／兒下注云和玉林／韻蓋爲遺蛻山／中桃作與此本／注少異」。次の「蕩山溪二首缺」、「蝶戀花・和玉林韻」（眉批「遼詞綜補入」）、「漁家傲」（正文

缺）、「西江月・太歲日作」はいずれも後に補入されたものである。『袁宣公詞』、題目の下に「荳圃收藏」の印記がある。目録に列された詞調の下に詞の數及び後に添えた葉數がある。正文に批點や誤字の描改が時々行われている。

『文簡公詞』、題目の下に「荳圃收藏」の印記がある。『袁宣卿詞』と同じく、目録の詞調の下に同調の詞の數及び後に添えた葉數がある。眉批に間々改訂後の文字が書かれている。例えば「戴」（原文は「載」）、「瑞」（原文は「端」）、「天倫」（原文は「天儉」）。また「感恩」二首に小序「生朝」、「淑人生日詞」が補われた。

『中國古籍善本總目』集部詞類「宋八家詞八卷」條に「清初鈔本 十行 十八字無格副葉有鮑廷博寫目錄」とあり、所收詞集は「燕喜詞一卷」、「拙庵詞一卷」、「丞相李忠定公長短句一卷」、「撫掌集一卷」、「東澤綺語一卷」、「雙溪詞一卷」、「袁宣卿詞一卷」、「文簡公詞一卷」である^⑧。しかし、筆者が寓目した『宋八家詞八卷』（以下、八家詞と略稱する）は、實際は八家ではなく、九家であり、『中國古籍善本總目』では『碎錦詞』一卷が漏れている。張乃熊『荳圃善本書目』「明鈔本」條に次のようにある。

宋人詞九種九卷 明鈔本 一冊 潛采堂舊藏
曹冠燕喜詞 趙磻老拙庵詞 李好古碎錦詞 李忠定長短句 歐良撫掌詞
張輯東澤綺語 馮取洽雙溪詞 袁去華宣卿詞 程大昌文簡公詞^⑨

八家詞本に「荳圃收藏」という張乃熊の藏書印があり、所收の詞目や順次も一致しているため、『中國古籍善本總目』に記載されている『宋八家詞八卷』はこの『宋人詞九種九卷』であると考えて良い。ただし、「潛采堂舊藏」とあり、「潛采堂」は朱彝尊の藏書室であるため、「清鈔本」

とする方が更に妥当であろう。

また八家詞本は勞權が鈔した十種本の底本でもある。前文に既に紹介したが、勞權十種本の每冊の表紙に「竹垞先生藏本」と題し、「咸豐壬子夏借知不足齋所藏曝書亭傳錄宋鈔本影寫」と勞權は述べている。一方、八家詞の副葉にも「宋詞鈔本」或は「竹垞先生藏本」と題している。『中國古籍善本總目』に據れば、副葉の目録は鮑廷博によって記入されたものであるが、中の『東澤綺語』四文字は明らかに勞權の筆跡である。即ち、八家詞はかつて勞權の手を経たことが分かる。正文に校注等を行った人物については、改訂の筆跡は副葉に書かれた目録のものと同じであるため、『中國古籍善本總目』に従い、鮑廷博であると考えて良いであろう。また勞權が鈔した内容は八家詞本の補入や描改が施された後の文字と全く一致している。例を挙げると、八家詞本『丞相李忠定公長短句』は、目録と正文の間に「笑不知天命明珠玉斗漫今撞碎」一句があり、正文は前三首が抜け、四首目の「水龍吟・光武戰昆陽」から始まる。勞權本も全く同じである。また八家詞本『燕喜詞』最後の一首「望海潮・紹興府西園席上」の首句「會稽盤藩鎮」は、『全宋詞』を検すると、中の「盤」は衍字であるが、勞權本はこの誤りを踏襲し同じく「會稽盤藩鎮」に作っている。従って、勞權がいう「知不足齋所藏曝書亭傳錄宋鈔本」はまさにこの八家詞本である。

ただし、八家詞本は「宋詞鈔本 四終／竹垞先生藏本」と題しているが、勞權が「典雅詞 竹垞先生藏本」と「典雅詞」と名づけて題したのは、おそらく朱彝尊の「跋典雅詞」の影響を受けたのであろう。「竹垞先生藏本 三終」「宋詞鈔本 四終」とあるから、副葉にある「□本」の缺けた文字は「宋詞鈔」の三字である可能性が高い。また竹垞先生藏本はもともと四冊があることが分かる。この點は『竹垞行笈書目』涯字號の「宋詞鈔四本」という記載と一致している。

上記の内容及び藏書印に據れば、朱彝尊本の逋傳の過程を以下のようにまとめることができる。

宋鈔本↓朱彝尊↓鮑廷博↓勞權↓朱文均↓傅增湘↓趙鈔

←

張乃熊

4 六種本（上海圖書館所藏吳湖帆舊藏本）

鄧子勉氏の『宋金元詞籍文獻研究』に據れば、上海圖書館に『典雅詞』六種本が所藏されている。この本は元々吳湖帆の舊藏であり、題箋に「宋詞六種」とあり、下小字雙行で「吳氏梅影書屋珍藏『典雅詞』舊鈔本」と題し、また「拜經樓舊藏鈔本」と題している。吳湖帆の題識に據ると、この本は朱孝藏の所藏であり、『疆村叢書』の底本でもある。半葉八行、行十八字。六種は張掄『蓮社詞』、京鏗『松坡居士詞』以外、ほかの四種は既に毛氏、朱氏の所藏に見える。

5 三種本（北京大學圖書館所藏鈔本 日本國會圖書館

台灣國家圖書館（マイクロフィルム覆寫による）

清鈔本。一冊。姚述堯『簫臺公餘詞』、倪偁『綺川詞』は半葉八行、行十六字であるが、曹冠『燕喜詞』は半葉八行、行十八字である。卷首に「吉甫／所藏」、「嘉蔭／移藏／書印」、「綺川詞目錄」首「嘉蔭／移藏／書印」。卷末「文正／曾孫」、「劉印／喜海」。表紙に劉喜海の題記があり、次のように記している。

宋人詞三種 朱氏竹垞詞綜選有／此三種他書未見／著錄

簫臺公餘詞 姚述堯

綺川詞 倪偁

燕喜詞 曹冠

右三種得之朱氏茶華唵館皆傳

鈔秘本也。汲古閣宋人詞百家其

已刊者六十此在未經〔刊〕四十家之内

道光闕逢涪灘七月 燕庭志□（印記の文字模糊不清）

劉喜海がこの三種本を鈔したのは道光甲申（一八二四）である。この三種本について王重民は『中國善本書提要』詞類に次のように述べている。

劉氏題爲『宋人詞三種』、不知爲『典雅詞』殘帙。余按『千頃堂書目』卷三十二有『典雅詞』□卷、姚述克（按克爲堯誤）『簫臺公餘詞』、倪偁『綺川詞』、邱壑『文定公詞』各一卷。僅第三種不同、蓋傳鈔時有移易。劉氏又云「朱氏竹垞詞綜選有此三種、他書未見著錄」。則此本始出於朱氏從文淵閣傳錄之一冊歟。

劉喜海は表紙に「朱氏竹垞詞綜選有此三種、他書未見著錄」と題しているが、朱竹垞の『詞綜』を検してみると、「發凡」に「曹冠『燕喜集』（中略）隻字未見²¹⁾」とあり、即ち朱彝尊は『詞綜』を編集する際、曹冠の『燕喜詞』は未見であったため、収録していなかったのであろう。

以上のように、現存する既知の『典雅詞』には十四種鈔本、八家詞本、十種鈔本、六種鈔本、三種鈔本がある。その中で『燕喜詞』が収録されているのは、十四種鈔本、八家詞本、十種鈔校本、三種鈔本である。十四種鈔本は毛晉汲古閣影宋鈔本を源とするものであり、八家詞本は十種鈔校本の底本である。また八家詞本や十種鈔校本に収録されている詞目は十四種と異なっているため、朱彝尊は他の宋本より抄録したことが分かる。そのほかに、劉喜海傳鈔朱筠椒花吟館本があるが、鈔録された詞目

は『詞綜』と合わないため、さらに検討する必要がある。

二 『燕喜詞』について

1 南宋における『燕喜詞』の刊行状況

曹冠の詞集である『燕喜詞』の南宋版本については、王兆鵬氏が『宋代文學傳播探源』第十一章に既に言及している²²⁾。この詞集の最も早い刊行は淳熙十四年丁未（一一八七）に宣城で太守大監である詹公という人物によってなされた。その刊行の経緯は詞集の冒頭にある陳鬚及び詹傲之二人の序文から分かる。まず陳鬚の序文を以下に引いておこう。

同年檢正曹公文雄學奧、節勁氣嚴。三十年臺省舊人也。不辭小試來游宣幕。使君大監狀元詹公既深知之、一見其文集尤加歎賞、敍而鋟板于郡庠、名之曰雙溪。因其居也。又以其所著樂府可歌於閨門之内者、別爲一集、名之曰燕喜²³⁾。

同年の檢正曹公は文雄學奧、節勁く氣嚴なり。三十年臺省の舊人なり。小試を辭せず來りて宣幕に遊ぶ。使君の大監狀元詹公は既に深く之を知り、一たび其の文集を見て尤も歎賞を加え、敍して板を郡庠に鋟して、之を名づけて雙溪と曰う。其の居に因るなり。又た其の著わす所の樂府の閨門の内に歌うべき者を以て、別に一集と爲して、之を名づけて燕喜と曰う。

また詹傲之の序文は次のようにいう。

檢正曹公行兼九德、渾然天成。文章政事、淵源經術、廉介有守、

既和且正。太守大監詹公歎賞其文、據其大略而刊諸宣城學宮。既有成集矣、復以其所著樂府、析爲別集、名曰燕喜詞。(中略)。淳熙丁未仲夏望日宣城丞鈞臺詹傲之書。

檢正曹公は行い九徳を兼ね、渾然として天成す。文章政事、經術に淵源し、廉介にして守有り、既に和して且つ正なり。太守大監詹公はその文を歎賞し、其の大略を據いて諸を宣城の學宮に刊せしめ、既に集を成す有り、復た其の著わす所の樂府を以て析ちて別集と爲し、名づけて燕喜詞という。(中略)。淳熙丁未仲夏望日宣城丞鈞臺詹傲之書す。

序文に據れば、淳熙丁未(一一八七年)に曹冠の作品が宣城で刊行し得たのは當時の太守大監である詹公の力によるものである。先に刊行されたのは文集『雙溪集』であり、詞集の『燕喜詞』はその後であった。南宋には曹冠の詞集は單刻本の形で世に傳わっていたことが分かる。しかし原刻の文集『雙溪集』及び詞集『燕喜詞』は久しく散逸し、いずれも後世に傳わっていない。

『燕喜詞』はまた長沙書坊刻本「燕喜集一卷」²⁴⁾及び先述した南宋臨安の陳氏書棚本『典雅詞』本がある。原刻はいずれも傳わっていない。

楊萬里、祝尙書、吳熊和に據れば、現在傳わっている毛晉汲古閣影宋本『典雅詞』本『燕喜詞』は、即ち陳氏書棚本からの鈔録である。そのほかに、前文に擧げた八家詞本(竹垞先生所藏本)がある。この二種類を校勘すると、兩本は文字と款式において少し相違があることが分かる。文字の異同について、例えば、「光」(汲古閣本)と「先」(八家本)、「遶」(汲古閣本)と「繞」(八家本)等との違いがある。款式においては、汲古閣本「臨江仙・明遠樓」の「明遠樓」三文字は雙行になるが、八家詞本は單行になっている。また汲古閣本「望海潮・紹興府西園席上」は小字

雙行になっているが、八家詞本は單行である。そのほかに、汲古閣本には「桓」、「度」、「渡」が闕筆であるが、八家詞本には闕筆が見られない。全體的に言えば、二種類の鈔本は流傳過程が異なるが、正文上においては大きな異同がない。

2 『燕喜詞』の諸鈔本

(1) 韓應陞跋清初影鈔宋本(台灣國家圖書館所藏)

王兆鵬氏『宋代文學傳播探源』「燕喜詞」における記述に據れば、韓應陞が跋を加えた清初影鈔宋本の卷首に詹傲之と陳鬚の序があり、序後に目錄があり、詞六十四首。書末に咸豐八年六月十四日韓應陞の題跋がある。この本について王氏は、もともと黃氏士禮居に所藏されていたと述べておられ、汲古閣影鈔本であるかどうかについて少し疑問を抱かれています。上掲の汲古閣影鈔本『典雅詞』本『燕喜詞』と行款や所録詞の数が一致しており、ともに黃丕烈の藏書印があるが、行款や文字に異同があるため、韓應陞が題跋したこの本は汲古閣影鈔本ではない可能性が高い。またこの清初影鈔本「燕喜詞」は汲古閣『典雅詞』本から抜き出したものであると推測できる。ただし、現存する『燕喜詞』に收録されている詞の数は、嚴密に言うくと六十三首であり、一首は「和陶淵明歸去來詞」、「乃文體而非詞體(乃ち文體にして詞體に非ざる)」²⁵⁾ため、詞には屬し難いと思われる。

清初影鈔宋本の具體的な通藏狀況はその藏書印から分かる。藏書印は下記の通りである。

「應陞／手記印」白文方印、「天都山樵」白文長方印、「張珩／私印」白文方印、「吳興張氏／圖書之記」朱文長方印、「張氏／圖書」朱文方印、「國立中央圖書館收藏」朱文長方印、「士禮居藏」朱文長方印、「黃丕／丕烈」朱文方印、「蕘／圃」朱文方印、「韓德／均藏／宋本」朱文方印、「吳興張

／氏韞輝／齋曾藏」朱文方印、「希／逸」白文方印、「密均／樓」朱文方印、「韓子毅珍／藏書畫印」朱文長方印、「韓德均／所藏善／本書籍」白文方印、「古婁韓氏應陞／載陽父子珍藏／善本書籍印記」朱文長方印、「平江／黃氏／圖書」朱文方印、「蔥／玉」朱文方印、「百耐／眼福」朱文方印。

「天都山樵」は誰の藏書印なのかは不明であるが、以上に據れば、清初影宋鈔本『燕喜詞』の通傳の大體の過程をまとめると、下記のようになる。

毛晉汲古閣→陸心源→陸樹聲→黃丕烈→繆荃孫→趙尊嶽→蔡廷相

←

丁丙

黃丕烈→韓應陞→韓載陽→韓德均→蔣汝藻→張珩→鄒百耐 (天都

山樵?)

(2) 『五家詞五卷』(天津圖書館所藏)

『天津圖書館古籍善本書目』詞類に次のように記されている。

五家詞五卷 清十萬卷樓鈔本 一冊 十一行二十一字藍格白口左右雙邊 下書口鐫十萬卷樓鈔本 鈴錢塘丁氏正修堂藏書朱文方印 八千卷樓

珍藏善本朱文長方印

碎錦詞一卷 宋李好古撰 拙菴詞一卷 宋趙礪老撰

燕喜詞一卷 宋曹冠撰 袁宣卿詞一卷 宋袁去華撰

龜峰詞一卷 宋陳經國撰

『八千卷樓書目』卷二〇に「燕喜詞一卷 宋曹冠撰 典雅詞本 十萬卷樓抄本 別下齋本 四印齋本」とある。「十萬卷樓鈔本」『燕喜詞』本は天津圖書館所藏の「五家詞五卷」を指している。

(3) 『宋六家詞六卷』(中國國家圖書館所藏マイクロフィルム)

清鈔本。一冊。正文及び目錄、無界十行、十八字。首に「均伯／過眼」、「北京／圖書／館藏」、「伯遽」、「休陽汪氏／裘杼樓／藏書印」、「碧巢／秘笈／定本」印を鈐す。卷末に「北京／圖書／館藏」、「留有餘不盡／之福以貽子孫」印を鈐す。正文は「碎錦詞」次行低三格「鄉貢免解進士 李好古」から始まり、目錄がない。次「雙溪詞目錄」、正文「雙溪詞」低三格「雙溪擬巢翁延平 馮 取治 熙之」。「拙庵詞」、目錄がなく、題目次行低九格「東平 趙礪老 涓師」。「燕喜詞」正文の前に陳・詹二氏の序文がある。次に「燕喜詞目錄」、正文「燕喜詞」次行低五格「宋 雙溪居士曹 冠字宗臣」。「袁宣卿詞目錄」、正文「袁宣卿詞」低九格「豫章袁去華 宣卿」。最後の「章華詞」は、目錄がなく、著者が不明なため、題目の次行に一格を空け、正文は「虞美人」から始まる。

『六家詞六卷』は鈔本とはいえ、字迹が整って秀麗であり、全篇を通じて訂正や塗改の痕跡が見られない。

上記の諸本以外、『燕喜詞』に關する記載は他の各書目にも見える。清・曹寅『棟亭書目』に「燕喜詞一卷鈔本 宋曹冠著」、清・陸澐『佳趣堂書目』に「曹冠燕喜詞一卷」とある。上記のほか、上海圖書館所藏の『疆村叢書』十六種二十二卷稿本にも『燕喜詞』一卷が収録されている。「稿本以丁氏嘉惠堂(鈔本作底本重編竝校) 十一行二十字黑口左右雙邊」(『中國古籍善本綜目』)である。

2、『燕喜詞』の収録状況

(1) 八家詞本及び『詞綜』未収録の『燕喜詞』

先述したように、『燕喜詞』は最も早く刊行された南宋版本が傳わっておらず、明代になって、毛晉汲古閣影宋鈔本があり、後に八家詞本、勞權本及び劉喜海の『宋人詞三種』本等の鈔本がある。八家詞本に『燕喜

詞』が鈔録されるのは、朱彝尊が宋鈔本を傳録した際、所收の『燕喜詞』を經眼しただけでなく、抄録したのである。しかし、朱彝尊が編纂した『詞綜』『發凡』に『燕喜集』『隻字未見』とあり、朱彝尊は『燕喜詞』を未見書に屬せしめている。ここでは試みにその理由を探究していきたい。

「跋典雅詞」に據れば、朱彝尊が慈仁寺本を得たのは「未通籍時」であり、彼が「通籍」し、即ち博學鴻儒になったのは康熙十七年の正月（二六七八）である。そうすると、朱彝尊が慈仁寺本を入手したのは康熙十七年より以前である。『詞綜』が最初に刊行されたのは康熙十七年の三十卷本であるが、最後の四卷は汪森と互いに検討して増補されたものであり、朱彝尊自からが編集したのは前の二十六卷である。二十六卷が編集された具體的な時期について、『朱彝尊年譜』に「『詞綜』十八卷編成於康熙己酉（一六六九）、至壬子（一六七二）廣爲二十六卷、（後略）」とある。即ち朱彝尊が『詞綜』を編集する過程で、十八卷から二十六卷まで増卷する期間において、未収録とする詞集には、もちろん彼の採取基準に合わないため収録しなかった詞集もあれば、實際に未見の詞集もあった。『燕喜詞』はその一つである。即ち、朱彝尊が最初に手に入れた慈仁寺『典雅詞』本には『燕喜詞』が収録されていなかったのである。

また「跋典雅詞」に「後予分纂一統志」云々とあるが、朱彝尊が『大清一統志』の編纂に加入したのは康熙二十二年（一六八三）二月であり、その後に「所存書目」本の鈔本と傅君家藏本を入手した。「論及前刻、掛漏尙多、欲謀爲定本而卒難刊改、思補輯以成完書」（『詞綜』『補遺後序』）を趣旨とし、康熙三十年（一六九一）に汪森裘杼樓による『詞綜』三十六卷の増刻本が刊行された。初刻の康熙十七年から増刻の康熙三十年までの十三年間の期間に、未見の詞集を手に入れたのであれば、朱彝尊にとっては今回の増刻が増補の絶好の機会であるが、増刻の内容に「發凡」に列された未見の詞集は僅か二家、汪元量九首、蔡柟一首が収録されている

のみである。『燕喜詞』は補われていない。

實は、『典雅詞』十四種本及び八家詞本とともに収録されていて、『詞綜』に収録されていない詞集は『燕喜詞』だけではない。

『蓮子居詞話』卷二「知不足齋寫本詞」に次のように書かれている。

知不足齋寫本詞、竹垞詞綜未採者、宋曹冠燕喜詞一卷、袁去華宣卿詞一卷、李好古碎錦詞一卷、趙蟠老拙庵詞一卷、元韓奕韓山人詞一卷。

鮑廷博が鈔した詞目に據れば、鮑氏が本を入手した時少なくとも三冊が残されていたが、現存するのは後の二冊のみであり、即ち八家詞本である。朱彝尊が未見の詞集『燕喜詞』、未收の詞集『拙庵詞』、『碎錦詞』三種は「宋詞鈔本四」という一冊に收められている。しかし、竹垞先生藏本でありながら、朱彝尊が「未見」と述べたのは、朱氏が「發凡」を書いた當時、即ち康熙十七年あるいはその前に『燕喜詞』を得なかったのである。康熙三十年に刊行された『詞綜』三十六卷についてはその編集は主に汪森らによつて行われ、「未見」詞は僅か二家しか補われていないことから、汪森を主とする『詞綜』三十六卷の増刊の目的は漏れた内容を補うことにあり、「未見」詞の補足に重點を置いていなかったのである。また増刊に未見詞の多くが収録されていないのは汪森が詞集を發見しなかったということではない。先述した國家圖書館所藏の『宋六家詞六卷』に「發凡」の「未見」詞集が収録されており、また「休陽汪氏／裘杼樓／藏書印」、「碧巢／秘笈／定本」の印記があるため、汪森がこれらの詞集を見なかったとは言えない。補入されていないのはおそらく汪森の採取基準と主旨が朱彝尊と異なっていたからであろう。

ちなみに曹冠の詞作を『詞綜』に補ったのは『明詞綜』の著者である王昶である。王昶は「發凡」に挙げられた朱彝尊の未見書に留意し、「然

其凡例尙稱有知而未見者、故餘數十年來凡遇宋元人集悉心檢閱、陸續鈔撮（然れども其の凡例に尙お知りて未だ見ざる者有りと稱す、故に餘は數十年來凡そ宋元人集に遇えば心を悉して檢閲し、陸續として鈔撮す）（『詞綜』三十八卷「跋」）。そのため、曹冠の作品を補入したのである。『詞綜』卷三十七に「夏初臨・淳熙戊戌（後略）」、「浣溪沙・柳」、「宴桃源・游桃源」、「滿江紅」（日暖煙輕）、「喜遷鶯・上巳游碧涵」、「小重山」（風颭池荷）、「卜算子・夢仙」、「臨江仙・明遠樓」八首が補われている。

（2）『宋人詞三種』における『燕喜詞』

先述した日本國會圖書館・台灣國家圖書館所藏の劉喜海藏『宋人詞三種』とは姚述堯『簫臺公餘詞』一卷、倪偁『綺川詞』一卷、曹冠『燕喜詞』一卷という三種である。王重民が『中國善本書提要』で言及した黃虞稷『千頃堂書目』卷三十二詞曲類に記載されているのは「典雅詞□卷、姚述堯簫臺公餘詞、倪偁綺川詞、丘壑文定詞各二卷」である。この條の後に小字で「此目係盧氏補」との注がある。また『宋史藝文志補』にも次のような著録がある。

典雅詞三卷、姚述堯簫臺公餘詞、倪偁綺川詞、丘壑文定詞各一卷。³⁷⁾

『宋史藝文志補』は倪燦、黃虞稷が編集し、盧文弨が訂正を加えたものである。『宋史藝文志補』に「典雅詞三卷」と書かれており、簫臺公餘詞、綺川詞、文定詞が収録されている。『千頃堂書目』に同様の詞集三種が盧文弨によって補われている。そのため、二書に記されている『典雅詞』は同一本であると考えられる。従って、『千頃堂書目』にある「典雅詞□卷」の闕字は「三」に間違いない。

ところが、『宋人詞三種』所收の第三種は『燕喜詞』一卷であり、『千頃堂書目』及び『宋史藝文志補』に記載されている『文定詞』一卷と異なる。

る。この相異に對して、王重民は『中國善本書提要』では「僅第三種不同、蓋傳鈔時有移易」と解釋している。前掲のように、劉喜海所藏の三種本の前二種『簫臺公餘詞』、『綺川詞』は半葉八行、行十六字であるが、『燕喜詞』は半葉八行、行十八字であるが、『燕喜詞』は半葉八行、行十八字である。また三種の行款は既知の『典雅詞』十四種、十種の行款と一致していない。『宋人詞三種』において劉喜海は「朱氏竹垞詞綜選有此三種」と述べたが、前文で論じたように、『燕喜詞』は『詞綜』「發凡」で既に未見書に屬され、本文にも収録されていない詞集である。調べてみると、『詞綜』に採取される『典雅詞』本と一致する詞集は張掄『蓮社詞』一卷、侯寘『爛窟詞』一卷、黃公度『知稼翁詞』一卷、倪偁『綺川詞』一卷、姚述堯『簫臺公餘詞』一卷、京鐘『松坡居士樂府』一卷、丘崇『文定公詞』一卷、陳亮『龍川集』詞二卷、張輯『東澤綺語債』一卷、計九家である。この九家の中に『千頃堂書目』及び『宋史藝文志補』に記載されている姚述堯『簫臺公餘詞』一卷、倪偁『綺川詞』一卷、丘崇『文定公詞』一卷がある。おそらく劉喜海が言っているのはこの三種であろう。

また李盛鐸『木樨軒藏書題記及書錄』に以下のようにある。

『燕喜詞』一卷 舊鈔本（清鈔本）

宋曹冠宗臣撰。半葉八行、行十八字。首長樂陳彤□序。末有「味經書屋」朱文方印。³⁸⁾

李盛鐸が記した『燕喜詞』一卷は、行款や字數が『宋人詞三種』本『燕喜詞』と一致しており、また末に劉喜海の書齋名である「味經書屋」の印記があるため、この『燕喜詞』一卷は劉喜海の所藏であったのであろう。

王重民は「此本始出於朱氏從文淵閣傳錄之一冊歟」と推測したが、『燕喜詞』はさておき、『宋人詞三種』に録された前二種の行款及び字數は既知の八家詞本と異なるため、『典雅詞』本ではないと言って良いであろう。

3 『燕喜詞』の通行本

現行の『燕喜詞』は蔣光煦『別下齋叢書』本、王鵬運四印齋『彙刻宋元三十一家詞』本（用傳鈔本、據蔣本改正）、『叢書集成初編』本及び『續金華叢書』本、『全宋詞』である。その中、『叢書集成初編』本は『別下齋叢書』による影印であり、『彙刻宋元三十一家詞』本は傳鈔本を底本にし、『別下齋叢書』本によって改訂を加えたものであり、『續金華叢書』本は四印齋本による影印である。唐圭璋の『全宋詞』も四印齋本を底本にし、勞權本によって校勘を行っている。諸本の關係を圖示すると次のようになる。

傳鈔本↓四印齋所刻本（據蔣本改正）↓續金華叢書
 傳鈔本↓別下齋叢書↓叢書集成初編 全宋詞（據典雅詞本改正）

『叢書集成初編』本の首に阮元の『學經室外集續提要』が掲げられており、以下のような内容である。

燕喜詞一卷。宋曹冠撰。冠字宗臣、號雙溪居士、東陽人。見縣志。此本有淳熙丁未長樂陳□及鈞臺詹效之二序、文云、檢正曹公臺省舊人、來游宣幕。太守大監詹公、歎賞其文、刊諸宣城學宮。復以所著樂府、析爲別集、名曰『燕喜』。今從毛氏汲古閣舊藏本錄出。³⁹⁾

阮元が録出した『燕喜詞』一卷は毛晉汲古閣所藏影宋鈔本であることが分かる。

また王鵬運は四印齋『彙刻宋元三十一家詞』『燕喜詞』の末尾に次のように述べている。

『典雅詞』及び『燕喜詞』諸本

宗臣詞世尠傳本、僅一刻于海昌蔣氏別下齋叢書中。印行未廣、兵燹後版佚無存。近杭州書賈做袖珍本石印、譌誤幾不可讀。此傳鈔本較爲精整、間有誤字、據蔣本改正、遂成完璧。其中和歸去來辭一首、非長短句體、或當時可被管弦、故附于此、仍之目存舊觀。（批點は筆者による）⁴⁰⁾

宗臣の詞は世に傳本尠く、僅かに一海昌の蔣氏の別下齋叢書中に刻せらるるのみ。印行未だ廣からずして、兵燹の後に版は佚して存する無し。近ごろ杭州の書賈は袖珍本に做いて石印するも、譌誤たりて幾んど讀むべからず。此の傳鈔本は較や精整爲り、間ま誤字有るも、蔣本に據りて改正し、遂に完璧と成る。其の中の和歸去來辭の一首は、長短句の體に非ざるも、或は當時管弦に被らしむべし、故に此に附す、之に依り目舊觀を存す。

『燕喜詞』には既知の限りでは次の鈔本がある。⁴¹⁾

毛晉汲古閣影宋本

（靜嘉堂文庫所藏）

阮元錄毛氏汲古閣舊藏本

（『學經室外集續提要』（『叢書集成初編』本）

丁丙鈔本

（南京圖書館所藏）

繆荃孫鈔本（日本國會圖書館・京大人文学科研究所・台灣國家圖書館所藏

（マイクロ）

勞權鈔本

（中國國家圖書館所藏）

宋八家詞八種本

（中國國家圖書館）

劉喜海鈔本

（日本國會圖書館・台灣國家圖書館所藏）

韓應陞跋黃丕烈舊藏影宋本

（台灣國家圖書館所藏）

現存する『燕喜詞』の版本では、よく使われているのは、『別下齋叢書』本、四印齋『彙刻宋元三十一家詞』本、『續金華叢書』本、『全宋詞』本、『叢書集成初編』本である。『別下齋叢書』本『燕喜詞』及び四印齋

詞調	小序・内容	四印齋本	別下齋本	三種本	注記
鳳棲梧	尋芳飲於小園・元名蝶戀花	尋芳飲於小園	尋芳飲於小園・元名蝶戀花	尋芳飲於小園・元名蝶戀花	四印齋本無「元名蝶戀花」
	賞花對月	賞花對月	賞花醉月	賞花對月	別下齋本作「醉」
風入松	雙溪閣觀水 春鋤鶯也掠水	春鋤掠水	春鋤鶯也掠水	春鋤鶯也掠水	四印齋本無「鶯也」
	供吟毫	供吟毫	任吟毫	供吟毫	別下齋本作「任」
喜朝天	綺霞閣即踏莎行	即踏莎行 綺霞閣	綺霞閣即踏莎行	綺霞閣即踏莎行	四印齋本小序の順番異
和陶淵明歸去來詞	羨鴛蹇而欲追	笑鴛蹇（別作策鴛）而欲追	策鴛蹇而欲追	羨鴛蹇而欲追	（別作策鴛）爲王夾注
	聽嚶鳴之關關	聽嚶（別作鴛）鳴之關（別作聞）關	聽鴛鳴之聞關	聽嚶鳴之關關	（別作鴛）（別作聞）爲王夾注
	容萬象於度內	容萬象於庭（別作度）內	容萬象於度內	容萬象於度內	（別作度）爲王夾注
念奴嬌	蜀川三峽 女恥求媒	仙（別無仙字）女恥求媒	女恥求媒	女恥求媒	（別無仙字）爲王夾注
念奴嬌	詠中秋月 簾櫳如畫	簾櫳如畫（別作畫）	簾櫳如畫	簾櫳如畫	（別作畫）爲王夾注
西江月	示忠彥 叢桂吐清芬	叢桂吐清芬	叢桂唾清芬	叢桂吐清芬	別下齋本爲「唾」
水調歌頭	游三洞 揮翰筆通神 四序景常新	揮翰墨（別作筆）通神 四序景常新	揮翰筆通神 回序景嘗新	揮翰筆通神 回序景常新	（別作筆）爲王夾注、別下・三種本異
蘭陵王	涵碧 綵筆題石	彩筆題石	綵筆題石	綵筆題石	四印齋本「彩」字異
驀山溪	乾道戊子日游涵碧	乾道戊子秋游涵碧	乾道戊子秋日游涵碧	乾道戊子日游涵碧	別下齋本・三種本同
	乘興約登臨	乘興約登臨	乘興約同臨	乘興約登臨	別下齋本異
水龍吟	梅 碧瓊枝瘦	碧瓊枝瘦	碧瓊扶瘦	碧瓊枝瘦	別下齋本作「扶」「峰」
	遊蜂戲蝶	遊蜂戲蝶	遊峰戲蝶	遊蜂戲蝶	別下齋本「蝶」字異
滿江紅	淳熙丁酉 清節無瑕	清潔（別作節）無瑕	清節無瑕	清節無瑕	四印齋本作「潔」
滿江紅	日暖煙輕 池光弄碧	池光青（別作弄）碧	池光弄碧	池光弄碧	（別作弄）爲王夾注
	邀賓排日去尋芳	邀賓明（別作排）日去尋芳	邀賓排日去尋芳	邀賓排日去尋芳	（別作排）爲王夾注
桂飄香	元和花心動 橫碧煙霏斂	橫碧煙霏斂	橫碧煙飛斂	橫碧煙霏斂	別下齋本作「飛」
喜遷鶯	上巳遊涵碧 蕙蘭香吐	蕙蘭香吐	蕙蘭香唾	蕙蘭香吐	別下齋本作「唾」
碣遍	吾與子樂之興襄羊	吾與子樂之興徜徉	吾與子樂之興襄羊	吾與子樂之興襄羊	四印齋本作「徜徉」
滿庭芳	榴艷噴紅 情何感君	情何憾君	情何感君	情何感君	四印齋本作「憾」
望海潮	紹興府西園席上	末句 興頌美龔黃	前闕 興頌美龔黃	末句 興頌美龔黃	別下齋本分前後闕

に用いられた傳鈔本について他本と比較することでその異同を探究していきたい。

なお、表における詞調及び小序・内容の部分は毛晉汲古閣影宋本より録す。注記の「王夾注」は王鵬運四印齋本にある夾注を指す。

別下齋本の底本は判断できないが、表から分かるように、別下齋本はほかの諸本と比較すると少し文字上の違いが見られるが、大きな差異はないのである。ただし、『燕喜詞』所収の最後の一首「望海潮・紹興府西園席上」は残っているのは前関のみであるが、別下齋本が詞句の「輿頌美龔黃」の「輿」字前に空格を空け、前後関に分けている。王鵬運は該詞の末尾に夾注で「按此調佚後半関蔣刻於輿字分段恐誤」と述べているが、まさにその指摘の通りである。表に挙げたように王鵬運は別下齋本を用いて傳鈔本『燕喜詞』に校訂を加えたが、まだ行っていない箇所が残っている。また、王氏が持っていた傳鈔本は文字の相異から論じてきた諸鈔本と異なるものであることが分かる。表の注記に挙げた「四印齋本作」という部分は即ち他鈔本と異なる箇所である。

王鵬運が詞集の校刻を始めたのは光緒七年（一八八一）であり、『四印齋所刻詞』が成書するまで二十四年間を經っていた。その過程で、『宋元三十一家詞』が彙刻されたのは光緒十九（一八九三）年である。即ち、四印齋『宋元三十一家詞』が刻される前に、毛晉汲古閣影宋本、阮元鈔本（汲古閣本から鈔出）、劉喜海鈔本、八家詞本、勞鈔本、韓應陞鈔本（繆荃孫鈔本及び丁丙鈔本の抄録時期不明）『燕喜詞』は既に存在したが、王氏が傳鈔本を底本にし、別下齋本を用いて校勘を行ったのは、晩清になって『燕喜詞』の傳本が少なくなり、王氏は上記の鈔本を見られなくなった可能性が高い。そのうえ、坊間に流傳した版本は「譌誤幾不可讀」、そのため、手元にある傳鈔本を底本にし、海昌蔣氏別下齋叢書を校勘に用いたのであろう。

おわりに

以上、現存する宋代の詞集『典雅詞』の諸本、及び主にその一つである南宋の曹冠が著した『燕喜詞』について検討してきた。『燕喜詞』は毛晉汲古閣影宋鈔本及び勞權鈔本、劉喜海本などがあるが、北京國家圖書館で調査を行った結果、いままで言及されていなかった『宋八家詞八卷』本（正確には九家詞九卷）は實際は朱彝尊の藏本であり、勞鈔本の底本でもあることが明らかになった。また同じく北京國家圖書館所藏の『宋六家詞六卷』の藏書印から『六家詞』本がかつて汪森に所藏されていたことが分かる。これは『詞綜』三十六卷の増刊及び汪森の詞學研究において大きな意味があると思われる。

現在使用されている『燕喜詞』本は主に王鵬運の『四印齋所刻詞』本に基づいているが、諸本を校勘することで、王鵬運が用いた傳鈔本は他鈔本と文字上の異同があるため、もともと底本にした鈔本は別系統なのか、あるいは流傳過程で文字の變動があつたことが想像できる。いずれにしても、清末になって既に稀覯本になった『燕喜詞』は、現在では各地の藏書機關で清末以前の鈔本、毛晉汲古閣本、竹垞先生藏本などが見られるようになったのは版本流傳上においては重要な意義があると思われる。

注

- ① 趙萬里『校輯宋金元人詞』、台聯國風出版社、一九三一年。一九七二年重刊。
- ② 祝尙書『宋人總集叙錄』、中華書局、二〇〇四年。第三四三頁。
- ③ 吳熊和『唐宋詞通論』、上海古籍出版社、二〇一〇年。第三二〇頁。
- ④ 中國國家圖書館所藏勞權鈔本『典雅詞』十種本。『文淵閣書目』に「諸家宴喜詞三十冊」とあり、朱彝尊の所述と異なる。

- ⑤ 趙萬里『校輯宋金元人詞』、台聯國風出版社、一九三一年。一九七二年重刊。
- ⑥ 『永樂大典』第五冊卷一〇九九九、中華書局、一九八六年。第四五七八頁。
- ⑦ 村上哲見『日本收藏詞籍善本解題叢編類』（第一屆詞學國際研討會論文集）、一九九四年十一月。
- ⑧ 鄧子勉『宋金元詞籍文獻研究』、上海古籍出版社、二〇〇八年。第六頁。
- ⑨ 鄧子勉『宋金元詞籍文獻研究』、第十頁。
- ⑩ 勞權所錄の跋文は朱彝尊『曝書亭集』卷三十四「跋典雅詞」と文字の出入りがある。
- ⑪ 傅增湘『藏園羣書經眼錄』卷十九、中華書局、一九八三年。第一五九三、一五九四頁。
- ⑫ 清・莫友芝撰、傅增湘訂補『增園訂補邵亭知見傳本書目』に卷十六下、中華書局、一九九三年。第六八頁。
- ⑬ 芳村弘道「臺灣中央研究院傅斯年圖書館所藏の稿本『錢注杜詩』について——李爽氏「錢牧齋杜注寫本」考」補遺、『學林』第六十四號、中國藝文研究會、二〇一七年。四十五頁。
- ⑭ 溥增湘撰・王菡整理『藏園羣書校勘跋識錄』下、『書目題跋叢書』、中華書局、二〇一二年。第八三六頁。
- ⑮ 王文進『文祿堂訪書記』、廣文書局、一九六七年。第五二八、五二九頁。
- ⑯ 翁連溪編校『中國古籍善本總目』第六冊、綫裝書局、二〇〇五年。第一八四五頁。
- ⑰ 張乃熊『迂圃善本書目』、廣文書局、一九六九年。第一〇二頁。
- ⑱ 『竹垞行笈書目』、『中國歷代書目題跋叢書』第三輯、上海古籍出版社、二〇一〇年。第三八二頁。
- ⑲ 鄧子勉『宋金元詞籍文獻研究』、第十三、十四頁。
- ⑳ 王重民『中國善本書提要』、上海古籍出版社、一九八三年。第六八三頁。
- ㉑ 立命館大學所藏康熙十七年汪森裘杼樓刻三十年增刻本（三十六卷）、立命館大學西園寺文庫所藏亦齋同治四年刊本（三十八卷）を参照する。
- ⑳ 王兆鵬『宋代文學傳播探源』、武漢大學出版社、二〇一三年。第三六四（第三六六頁）。
- ㉑ 靜嘉堂文庫所藏毛晉汲古閣影宋本『典雅詞』。
- ㉒ 陳振孫『直齋書錄解題』、中文出版社、一九七八年。第七四八頁。
- ㉓ 唐圭璋『全宋詞』、中華書局、一九六五年。第一五三四頁。
- ㉔ 台灣國家圖書館の檢索に據る。
- ㉕ 『天津圖書館古籍善本書目』中、二〇〇八頁。第七三四頁。
- ㉖ 『八千卷樓書目』卷二〇、『海王邨古籍書目題跋叢刊』第四冊、中國書店、二〇〇八年。第三三四頁。
- ㉗ 清・曹寅『棟亭書目』十六卷（國家圖書館藏鈔本）、林夕主編、煮雨山房輯『中國著名藏書家書目匯刊』第十五冊、商務印書館、二〇〇五年。第二七八頁。
- ㉘ 清・陸澹『佳趣堂書目』不分卷（國家圖書館藏長洲章氏四當齋鈔本）、『中國著名藏書家書目匯刊』第二十一冊。第一三二頁。
- ㉙ 張宗友『朱彝尊年譜』、鳳凰出版社、二〇一四年。第二三三頁。
- ㉚ 張宗友『朱彝尊年譜』、第二二四頁。
- ㉛ 張宗友『朱彝尊年譜』、第二九四頁。
- ㉜ 『詞話叢編』第三冊、中華書局、一九八六年。第二四〇六頁。
- ㉝ 立命館大學圖書館西園寺文庫所藏、同治四年秋重校亦西齋本。
- ㉞ 黃虞稷『千頃堂書目』、廣文書局、一九六七年。第七九〇頁。
- ㉟ 『宋史藝文志・補・附編』、商務印書館、一九五七年。二六四頁。
- ㊱ 李盛鐸著・張玉範整理『木樨軒藏書題記及書錄』、北京大學出版社、一九八五年。第三八一頁。
- ㊲ 阮元『四庫未收書提要』に『擘經堂外集』卷一に「燕喜詞一卷提要」とある。『四部叢刊初編』本同。
- ㊳ 『四印齋所刻詞』、上海古籍出版社、一九八九年。第七五九頁。
- ㊴ 本文「一」『典雅詞』の鈔本」を参照。

（立命館アジア・日本研究機構専門研究員）